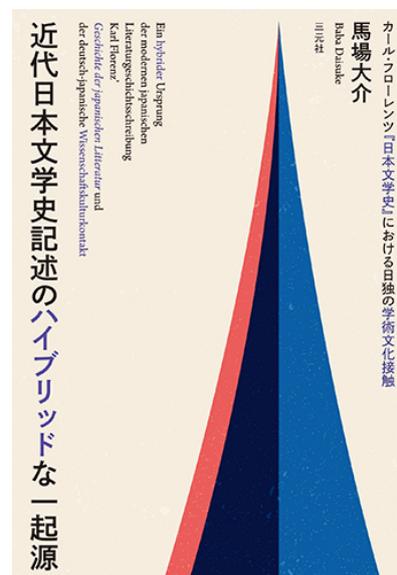


著書の出版と岩崎奨学金 (D. Baba) [J]

自宅のインターホンが鳴ったのは、午前10時頃であった。玄関まで急いで駆け寄る。2020年12月19日、発行を翌日に控えた自著15冊がついに届いたのだ。早速、そのうちの1冊を手にとってみる。『近代日本文学史記述のハイブリッドな一起源：カール・フローレンツ『日本文学史』における日独の学術文化接触』——このやや長いタイトルを掲げる四六判の書籍が、私のデビュー作である。以下では、この本を出版するまでの経緯を振り返りつつ、私がこれまでに考えたことを、出版助成として受けた「日本独文学会岩崎奨学金」と関連づけて述べていきたい。



私は2018年11月に立教大学で博士論文を提出し、翌年1月の口頭審査を経て、3月に学位を取得した。そして2019年4月、ドイツ語の講師として初めて教壇に立った。この頃から、博士論文の出版は念頭にあったが、まずは目の前の仕事に慣れて、それから論文の内容を補完していくつもりであった。博士論文を書籍化する際、その章立てから全面的に書き直す人もいるようだが、私の場合は、文章全体の構成はほとんど変えずに、不足している内容を補うかたちで、博士論文を一冊の本にする方針を固めていた。具体的には、本書の第1章第1節にあたる箇所を、新たに書き上げた。この節では、上記の著書のタイトルに見えるカール・フローレンツ (Karl Florenz, 1865-1939) という人物について紹介している。明治時代に来日したフローレンツは、日本のドイツ文学とドイツの日本学の開祖に位置づけられる。この人物の稀有な経歴については、ドイツ文学と日本学の専門分野においても、あまり知られていない。むしろこの状況に対して、自身の研究が持つ知識としての新しさをアピールできるのではないかと考えた。そこで、フローレンツの経歴について、日本語とドイツ語の文献を踏まえて、自身の論点からコンパクトにまとめた一節を、序論の後に据え置くことにした。この作業を進めるうちに、どのような読者が自著を読むのかを考えるようになった。日本のゲルマニスト、日本語・日本文学研究者、ドイツ語圏をはじめとする諸外国の日本学者をターゲットにするのはいうまでもない。日独関係の専攻分野以外にも、明治時代の近代化・文化交流に興味を持っている人は多い。さらに、教師として学生たちと接するうちに、アカデミックなことにまだ慣れていない人にも、自著を読んでもらいたいと思うようになった。こうして、「日本とヨーロッパの文化的邂逅に関心を寄せるすべての人」に向けて筆を執ることを決めた。

教師になって1年目の私の脳裏には、しばしば「業績」の二文字が浮かんだ。博士論文を提出するまでのおよそ1年間は、研究発表と論文執筆を一切行わなかったからである。そこで、まずは書籍化よりも論文化に舵を切った。研究発表も、いくつかアプライした。そうこうするうちに、2019年6月に学習院大学で春季研究発表会が、8月にアジア・ゲルマニスト会議が開催された。その際の発表を通じて、多くの方から貴重なご意見を賜った。その内容は、後に著書の論述の随所に反映していくことになった。12月には、独文学会主催のドイツ語論文執筆ワークショップに、実行委員の一人として参加した。2020年3月には、上記のフローレンツの経歴についての論文が、首都大学東京（現：東京都立大学）の紀要『人文学報』（No. 516-14）に掲載された。この論文の推敲は、編集委員会からの具体的なコメントのおかげで捗り、出来上がった論文の内容は、ほとんどそのまま著書に組み込むことができた。さらに上記のワークショップに刺激を受けて、いくつかの機関誌や論集にドイツ語の論文を投稿した。その際、立教大学のダーヴィッド・ヴァイス氏からいただいたコメントが、後に日本語で著書の原稿を執筆する時にも、大きな助けになった。この1年間は、業績を上げようと邁進する気持ちが、かえってプレッシャーになっていた感は否めない。その一方で、この1年なくしては、今回の出版はあり得なかった。

2020年に入り、周知の通り、新型コロナウイルスの感染が急速に拡大した。すべての授業をオンラインで行うことになった結果、授業の準備時間は増える一方で、通勤時間はなくなった。この変化は、自身の今後について考えるきっかけになった。その時、著書の出版を実行に移そうと思い立った。とはいえ、まずは一度きちんと書き直した原稿を完成させなければならない。原稿に手を入れながら、出版社を選定した。日本とドイツ語圏の両方の文学・文化論を扱い、かつ両方の専門家の目に触れやすい出版社はどこか。その中で若手研究者が直近で本を出版しているところはあるか。さらに、（本をハードカバーで出す必要はないと判断して）ソフトカバーの良書を刊行している出版社はどこか、等々の視点から調べを進めた。その結果、デビュー作は三元社から出版したいという希望を明確にした。原稿を完成させ、博士課程の研究を指導してくださった前田良三先生にお見せした。それから前田先生のご紹介を得て、三元社の石田俊二社長にコンタクトを取った。石田社長から出版の了承をいただいた時は、ひとまず胸を撫で下ろした。

ここまで来て、やっと岩崎奨学金への応募が可能になる。正式に出版の了承を得たのが6月中旬で、奨学金応募の締め切りが同月末であったので、少しあせっていた。その後、原稿と申請書類一式を独文学会事務局に提出した。8月中旬に審査結果を受けとった際、2名の審査員の方が原稿を熟読してくださったことを知った。このことは、私にとって大きな励みになった。発行部数が500部の自著をいったい何人が手に取るのか、さらにそのうち何人が自著を熟読してくれるのか。巡り合わせが悪ければ、デビュー作がほとんど誰にも読まれないということも、あり得ない話ではない。それでは本を出版する意味はないと思う。自著を

なるべく多くの人にきちんと読まれたいという希望は、出版が正式に決まって以来、日に日に強くなった。そこで、2名の貴重な読者を得たのだからありがたい。著者にとって出版の意味は、自身が作り出した知が読まれて磨かれることにあると思う。知が磨かれるというのは、著書が高く評価される可能性だけでなく、厳しく批判される可能性も念頭に置いて言っている。岩崎奨学金は、この可能性と私の研究活動を繋いでくれる紐帯だと思っている。ちなみに、採用通知の際、誤字脱字の指摘もいただいた。自分なりに誤植のない原稿を出したつもりだったが、ご指摘は少なくなかった。限られた時間の中で、改善すべき点は大いにあった。

それから出版までは、気力と体力の勝負であった。6月から8月にかけては、複数のドイツ語論文の査読結果・コメントが返ってきた。こちら也大いに改善すべき点があった。査読のコメントは厳密かつ明解で、自分の文章をきちんと読んでもらえたことに感謝した。ただ、そのコメントを踏まえて打開策を見出し、論文を書き直すまでには、相当な時間と労力を要した。夏季休業中は、これと同時並行で出版原稿を改稿し始めた。この状況が功を奏した。ドイツ語の論文で訂正した内容は、出版原稿にも反映することができたからである。また、日本語で書いた時には気がつかなかった不明瞭な論述も、ドイツ語の論文を改稿する過程でクリアになった。その結果、出版原稿の内容の一部は、以前よりもずっとわかりやすくなった。学期が始まると、いうまでもなく出版原稿の改稿にあてられる時間は限られた。その日の授業と次の日の準備を終えて、原稿に手を入れ始めるのは、たいてい午後8時を過ぎていた。それから作業に取り組めるのは、長くて2時間ほどで、それ以上は目を開けていられなかった。休日に作業を一気に進めたいと思いつつ、実際の作業は思ったほどは進まない。こうしてほぼ毎日改稿を続けた。第1校、第2校が出版社から送られてきて、赤を散らした原稿がデスクの脇を陣取り積み重なっていった。誤植はなくなるらない。第3校までくると、文言の大幅な変更はできない。そこで、註や索引のチェックに、特に集中した。やはり誤植は見つかる。念校でも、誤植に対する一抹の不安は消えなかったが、11月末に原稿を出版社に送り、責了となった。

出来上がった本を手に取りながら、次にやるべきことを考えた。これまでお世話になった方、学会やゼミナール等でお目にかかった方、本書のテーマに関心を持ってくれそうな他専攻の方に、献本を申し出た。ご連絡を差し上げた方々のうち、同時期に本を出版された方から、逆にご恵投いただくこともあった。面と向かって接する機会が制限されても、研究者同士、こうした交流を続けることができる。そのことに気がついた時、本を出版して本当によかったと思った。また、献本に関するやりとりは、近況報告にもなった。1年半以上お会いしていない方がほとんどである。そうした方々にご連絡した際、ドイツ文化ゼミナールやアジア・ゲルマニスト会議でのことを懐かしく思い出し、メールの文面についつい一言付け加えた。さらに献本は、ドイツ語圏の日本学者の方々も、快諾してくださった。その際に、実

感じたことがある。日本のゲルマニストとして、ドイツ語で成果を発表することが、自身の研究が国際的に認知されるチャンスになることは重々承知している。他方で、日本語の母語話者が日本語で研究成果を発表する場合も、国際化に繋がる可能性があることは、あまり意識してこなかった。日本とドイツ語圏に関する研究テーマは、日本語でも国際的かつ学際的に深めていくことができる。私にとって、日本語でも文章を書くことが、今後ますます重要になってくると実感した。あらためて、献本を受け取ってくださった方々に、この場を借りてお礼を申し上げる。

「拙著」という言葉は好きではない。本書をきちんと読んでもらいたいと思えばこそ、私はこの言葉を使わないつもりである。そんな本書は、324 頁の四六判で、適度に厚みがあり、手に取りやすい。カバーデザインも、個人的にとっても気に入っている。本書をかたちにしてくださった三元社の石田俊二社長と装幀を担当してくださった臼井新太郎氏に、心からの感謝を申し上げたい。こうした貴重な機会を実現できたのは、岩崎奨学金のおかげである。そして岩崎奨学金は、本書の内容が新しい知として磨かれる可能性も繋いでくれるはずだ。そう信じて、岩崎英二郎先生とご遺族の方に、今一度深甚の謝意を表す。

馬場 大介（立教大学）

0178

作成日 : 2021/04/07